

住岡狂風著 パンフレット

惱める女性の胸に

定価 参拾錢
送料 貳錢

念佛の父

定価 四拾錢
送料 貳錢

大正十四年七月一日(第三種郵便物認可)
昭和三年二月十五日發行(毎月一回十五日發行)

光明

第拾卷第貳號

定價金拾錢

大正十四年七月一日(第三種郵便物認可)
昭和三年二月十五日發行(毎月一回十五日發行)

光明

第拾卷第貳號

念を絶ち、嗔を棄て
人の違へるを怒らざれ
人には皆心あり
心にはおの／＼報るさころあり
かれ是なるときは則ちわれ非なり
われ是なるときは則ちかれ非なり
われ必ずしも聖にあらず
かれ必ずしも愚にあらず
さもにこれ凡夫のみ
是非の理なんぞ能く定むべけんや。

(聖徳太子)

大眞 日本 光明團本部發行

◆合 堂 宣 言

第一、我は之れ久遠劫來の業苦に備む。されど、傷き痛み憐める魂の底深く探る時、其處に洞徹し給ふ來の光明を仰ぎ、永遠に救ひ給ふ大悲の勅命を聞く。

第二、我はこれ曾無一善唯知作惡の凡夫。如來はこれ若不生者不取正覺の本願力に生き給ふみ親、罪惡如深重煩惱熾盛の我を其まゝ救ひ給ふ。

第三、喜まれたる隣人も亦、久遠の業苦に悲泣する慘しき輪廻の旅人。知らせん哉。彼の内に流れたまふ永遠の光明。聞せん哉。十方に漂流したまふ招喚の勅命を。

第四、悉くは自力小我の迷妄を破し、み光にはからはれて無我報謝の歡喜に生きん。

第五、「四海の信心の人は皆兄弟。」其處に共春の涙わく。共に和き、慰藉し、策勵して、相愛に生きん哉。

◆本 領

毀譽褒貶に動するなかれ。逆境に失意する勿れ。順境に驕るべからず。名利に迷惑する勿れ。念佛二道に精進せよ。

救はれたる者は立つて、全人類救済のために、熱き血と涙を以つて、念佛報謝宣傳のために、濁亂の社會に猛進せよ。

◆ び 叶 の 頭 卷 ◆

冬である。

萬物のしいたげられた冬である。

しかし眼をするごとくして見るがいい。

枯れた小草の間に

吹きさらされた小枝のさきに

強い／＼生命の力が動いてゐるではないか。

ふくらむ梅のつぼみと共に

春のめぐみは

大地の底深く動きつゝあるよ

生きたる者の心は躍る

願力……それは群生の上に廻向されためぐみである。

一切の障壁を破つて無碍虚空にのびてゆく。

往生極樂の意義

住岡狂風

極樂

『各々十餘ヶ國のさかひをこへて、身命をかへりみずして、たすねきたらしめたまふ御こころざし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり。』

といふ歎異鈔の第二章について味つて來ましたが、『往生極樂』といふことについて今少し考へてゆきます。先づ極樂についてであります。

極樂と云へば勿論阿彌陀佛の國土のことで、極樂の外に、(一)淨土、(二)安養界、(三)無量光明土、(四)寂靜無爲の樂、等の言葉で言表してあります。

そこで極樂の樂でありますが、一体佛敎で眞實の樂とは何を意味するのでありましようか、是については聖人が眞佛土の卷にひかれた、大般涅槃經に其答を求めませう

大般涅槃經に曰く

『善男子よ大樂あり。故に大涅槃と名づく。涅槃は無樂なり。四樂を以ての故に大涅槃と名く、何等をか四とする。一には諸樂を斷するが故に、樂を斷せざる者は、則ち名けて苦となす。若し苦ある者は大樂と名けず。樂を斷するを以ての故に、則ち苦あることなし。無苦無樂を即ち大樂と名く。涅槃の性は無苦無樂なり。是故に涅槃名けて大樂となす。この義をもつての故に大涅槃となづく。また次に善男子、樂に二種あり、一には凡夫、二には諸佛なり。凡夫の樂は無常敗壞なり。この故に無樂なり。諸佛は諸樂なり。變易あることなきが故に大樂となづく。復つぎに善男子、三種の受あり。一には苦受、二には樂受、三には不苦不樂受なり。不苦不樂これまた苦となす。涅槃も不苦不樂におなじといへども、しかも大樂となづく。大樂をもつての故に大涅槃となづく。』

二には大寂靜のゆへに名けて大樂となす涅槃の性はこれ大寂靜なり。なにをもつて

の故に一切慣闇の法を遠離するが故に。大寂をもつての故に大涅槃と名く。
 三には一切智の故に名けて大樂となす。一切智にあらざるをば大樂となづけず。諸
 佛如來は、一切智の故に名づけて大樂となす。大樂をもつての故に大涅槃と名く。
 四には身不壞の故に名けて大樂となす。身若し壞る可きは大樂と名けず。如來の身
 は金剛にして壞なし。煩惱の身 無常の身にあらず。故に大樂と名く。大樂をもつ
 ての故に大涅槃となづく。』

以上の御文によると四樂がある……それが大涅槃である。四つとは、一に
 は色々な樂を斷する、樂を斷するから苦を斷する。其苦樂を斷するところが大涅槃で
 ある。と云つて凡夫の不苦不樂とはちがふ。苦を斷じて樂を斷じた大樂の世界である
 二には大寂靜である。即ち一切の慣闇から遠くはなれてゐる。慣はみだれる闇はさう
 へんしいこと、みだれさうへんしいまよひをはなれてゐる。だから極樂のことを寂靜
 無爲の樂と云つてあります。この大寂靜のさとりだから樂である。三には一切智であ

るから大樂である。一切智は佛智である。智慧は光明である。だから極樂は無量光明
 土である。四には、大涅槃は金剛不壞である。即ち煩惱の身であつたり無常の身では
 ない身不壞であるから大涅槃であり、大樂である。と説明してあります。

親鸞聖人は眞佛土の卷に、

『謹んで眞佛土を案するに、佛は則ちこれ不可思議光如來なり。土はまた無量光明
 土なり。然ればすなはち大悲の誓願に酬報するが故に眞の報佛土といふ。』

と云ひ第十二の願光明無量の願と第十三壽命無量の願とを出しておられます。即ち
 淨土とは光明無量の土であります。この無量光明土に對して方便化身土を説明して、
 化身土の卷には

『謹んで化身土をあらはさば、佛といふは無量壽佛、觀經の説の如し。眞身觀の佛
 なり。土といふのは觀經の淨土なり。』

と云はれます。觀無量壽經の眞身觀の佛とは、

『無量壽佛の身は百千萬億の夜摩天の閻浮檀金の色の如し。佛身の高さ六十萬億那由他恒河沙由旬なり。眉間の白毫は右に旋りて婉轉して五須彌山の如し。佛眼は四大海水の如く青白分明なり。此の諸の毛孔より光明を演ずること須彌山の如し。彼の佛の圓光は百億大千世界の如し。』

ごありますこの觀經の佛は方便化土の佛で、眞佛ではないとせれ、眞佛は不可思議光如來である。無量光明土であるとせられたのであります。

我等が極樂往生を願ふ心持には随分と不純な混りものがします。功利主義の心のまじる不純心の前にあらはれるものはこの方便化身土であります。方便化身土では佛法僧の三寶を見ませぬ。美しい牢獄です。私どもは信仰生活においても、美しい化城に腰かけて、眞實の如來の招喚のみ聲を忘れてしまいます。我等が不純雜毒の善や行で淨土に往生しようとするごはおそろしいことであります。

不純な人間の願生心を純化し、純化して眞佛土を開放して下さつたが親鸞聖人であります。聖人にあつては。淨土に往生するといふことは、すぐ大般涅槃のさこりを開かせて貰ふことであり、淨土は全く涅槃界でありました。涅槃界は、生でもなく死でもなく、苦でもなく樂でもありません、ですから大經には、『虚無の身、無極の体』と云ひ、『無爲泥洹の道に次し。』と云ひ、天親菩薩は『第一義諦妙境界』と云ひ、善道大師は『極樂無爲涅槃界』と云ひ、法然は『寂靜無爲の樂』と云はれたのであります。それらは、全凡夫の樂がしたいとか、地獄にゆきたくないとか、死にたくないとかのためには表はされた化身土ではなくて、一切はからひを超え、一切の毒を純化した佛心そのものによつて得證せられる涅槃界であります。聖人は和讃に

『如來はすなはち涅槃なり、

涅槃を佛性となづけたり

凡地にしてはさとられず

安養にいたりて證すべし。』

『安養淨土の莊嚴は

唯佛與佛の知見なり

究竟せること虚空にして

廣大にして邊際なし。』

と説いてゐられます。即ち、淨土は我々の現實の世界と同一の次元にたつ美しい世界ではなくて、もつと高次の價値世界であります。唯佛與佛の知見とは、唯佛を知るものは佛の智慧であるといふことであります。凡夫は凡夫しか見ませぬ。無明の心は唯穢土しか見ませぬ。佛を見るものは唯佛心であります。佛心が佛土を見る。それが即ち眞佛眞佛土であつて涅槃界であります。

勿論淨土には、佛と佛國土と國土の菩薩と、この三種の莊嚴があります。しかしこ莊嚴にかたよつてしまへば、淨土は低級な世界となります。美しきが故に淨土ではありませぬ。莊嚴が具足されてあるが故に淨土ではありませぬ。『若し美しい諸相が如

來であるなれば、轉輪聖王も亦如來であります。如來は莊嚴の相だけで見てはなりません。』大涅槃の第一義諦であるが故に如來であります。即ち眞實智慧無爲法身こそ如來であり、淨土であります。若しこの涅槃を忘れて淨土の美しい莊嚴のみを功利心の對象として描くならばそれは化身土であつて、眞佛土ではありませぬ。

往生思想の純化

單なる概念の世界から出て信仰問題が我々の眞剣な願求となつて來た時、極樂と往生とは隔離することは出来ないものになつてきます。單なる往生はなくて極樂往生であります。極樂は彼岸であり。生死は現實であります。彼岸なくしては現實を感じることは出來ず。現實なくしては彼岸は意味をもちませぬ。そこでこの彼岸と生死の現實との間に横たはる問題が信仰問題であると云つていふと思ひます。

極樂に往生したい……………その私たちの願生の心には随分と不純

な心が雜ります。其不純な心をどうして純化するか、其處に過去の聖者たちのそれぞ
れの苦心があつたのではないかと思はれます。親鸞聖人の偉大は、この往生のこゝろ
を最純化されたところにあると思ひます。

如何にして眞實の國たる淨土に願生するか、これに對する聖人の答へを聞かなけれ
ばなりません。

衆生の心に生まるゝ願心、それは如來の願心の廻向せられたものであつて、凡夫の
けがれたる迷心ではない。即ち衆生の信心は如來の本願力が廻向顯現されたもので
ある。と云ふのがその答でありました。

如來の本願と衆生の信心とは如何なる關係を有するか、それは佛敎徒の長い間の問
題でありました。往生を願ふ凡夫の心と、十方衆生を救はんと誓つた法藏の本願とは
相應はしても、其体は實に別であると考へられてきたのであります。其處に如何にし
て如來の本願に相應するか、といふ問題を提げて長い間苦しんできたのであります。

若しこの問題に明確な答へを得ない限り、我等は決して救はれませぬ。

然るに親鸞聖人は、如來の願心がそのまゝ我等に廻向せられて、我等の願生心を生
ずるのである。即ち如來の本願と我等の信心とは其体を一にするのであるとせられた
のであります。

私より如來へと手をさしのべて救ひを請求すること、それは凡夫のもつ久遠の我執で
あります。しかし如何なるものをだしても、それは決して如來に相應する何ものでも
ありません。この『虚空雜毒の善をもつて、無量光明土に生せんと欲するは、これかな
らず不可なり。』であります。稱名をばげまふと、くつろぎ心をだそうと、よろこび心
をつくらふと、一切の善、一切のはからひ、それらの全てが、一度鋭い批判のまへに
おかれた時、淨土への行としては、ことごとく『急作急修して、頭燃をはらふがごと
くすれども、すべて雜毒雜修の善となづく、また虚假諂偽の行となづけ』られるので
あります。

こゝに新らしく宗教文化の上に宗教的真理の眞髓をつかんでこの問題を解決して下つたのが聖人であります。

我等が我等のけがれたものを如來へさしむけて如來の願心をよびますのではない如來の願心が、如來の名號を聞くことによつて、凡夫の上に廻向される、其處に如來の行と凡夫の行との二つはない。凡夫の行を如來の行に一致させるのではなくて、如來の行と衆生の行とが融合して一になる、信も行も佛心そのものによつて成就されてゆく、されば信卷には、『しかればもしは行、もしは信、一事として阿彌陀如來の清淨願心の廻向成就したまふところに非らざることなし。』と仰せられました。

かくて往生極樂のみちは、如來の願心そのもの、おはたらき以外になくなつたのであります。

人間の不純なる功利心は打ちくだかれて。我等の往生心は至純なる如來の願心に根ざして、清淨なる佛心の中に攝取されて如來の満足大悲圓融無碍の信心海を感得する

のであります。そうしてそれは如來の名號によつて表象されるのであります。

念佛よりほかに

『しかれば念佛よりほかに往生の道をも存知し、また法文等をもしりたるらんとこゝろにくゝおぼしめしておはしまして、はんべらんはおほきなるあやまりなり。もししからは南都北嶺にもゆゆしき學生たち、おほく座せられさふらふなればかの人々にもあひたてまつりて、往生の要よくゝきかるべきなり。』

今更にこの節に目をつけて深く味はせて頂く時、親鸞聖人の信仰の眞髓にふれてゆきます。

關東の眞劍なる求道者たちは、はる／＼聖人のお膝元に來て、何を聞き、何を求め何を得んとしたか。或は六ヶ敷い學問か或はめづらしい法文か。この眞劍なる求道者に對する『然るに』との仰せは實に青天の霹靂である。一切をうちかへされたのであ

る。しかるに念佛より外に往生のみちをも存知し、六ヶ敷い法文などをも知つてゐる。だらふところにくちもふなれば、それは大いなる誤りである。あやまりである！あやまりである！はつきりとした斷案であります。

聖人が偉大であつたのは、聖人が學者であつたためではない。金剛堅固の信念の所有者であつたからであります。

南無阿彌陀佛が聖人になりきつて、佛凡一体の境地に住してゐられたからである。信仰は生きたいのちであります。頭の中につめこまれた理論ではなくて、情意の世界眞實生きて動く心の世界の事實であります。

單純 純一なる價值感を持たないものは迷ひます。眞も善も美も一切の價值は唯如来のうちのみに統一体験せられる。燃ゆる火のように、それに竹をなげ入れても、木を折りくはへても、石油をかけても、其他何を入れても燃ゆる火は唯一つである聖人の中に燃ゆる唯一の火こそ念佛であつた。

一つの至上の價值の中に一切がとけて燃えてゆく、學問も經法も哲學も、いや煩悩も罪業も、この淨土より燃ゆる火に燃やされてゆきます。ものは複雑であります。しかし複雑が複雑のまゝであるならばそれは迷ゆるものゝころであります。たつた一つの聖なる如来心のうちに一切が一つに融合せられて複雑なるものゝまゝがたつた一つの火にされてゆく。

けれども聖人は決して學問を頭から棄てられたのではない。時代がゆるす正しい哲學理論を排斥せねば成りたないような盲信でもなく、單なる感情の陶酔でもなかつたのです。佛敎には偉大なる哲學があります。八萬四千の法文とか、幾千卷の經典とか、深廣な論や釋等、複雑な大きな深い哲理が説かれてあります。決して論理に反くのではなくて、學問や哲學を超えられたのであります。超論理であつて反論理ではない。聖人が念佛よりほかにと云ひきつてしまはれたのは、一切の佛敎哲理をこばみ棄てられたのではなくて、一切を超えられたのです。

凡聖の一切のはからひは、決して宗教的絶對境に到達する方法ではなかつたのです。華かにして雄大なる華嚴經も、幽嚴にして遠大なる涅槃經もそれらは全て、人間のこざかしい技巧の世界ではなくて、たつた一つの如來の輝きであり、如來の内的風光にすぎないのであります。美しいもの尊いもの聖いもの崇いもの、それらの名は皆、如來へとかへされてゆきました。

人間のこざかしいはかひの世界に美しいもの、尊いもの、聖いもの、崇いものが技巧されてゆくのではなくて、南無阿彌陀佛の中に法爾自然に内具されてあるのであります。一切の功利的なはからひがすたつて南無阿彌陀佛を頂戴してゆくところ、そこに純一な念佛の世界が開かれてゆきます。

愚かなるもの、それは常に新なるもの、奇抜なものをご選んでは、それを平凡化してゆきます。

然るに南無阿彌陀と云へばわずかに六文字にすぎませぬ。口に稱へれば唯の一句で

あります。しかもそれを全人格の上に生かすことによつて聖人は、古今獨歩、絶對他力、宗教生活の最究極の聖地にまで到達されたのであります。

太聖釋尊の上にあつたものも雑多にならべられた學問ではなくて、唯一の法身の成就であり、涅槃のさとりでありました。さうして末世五濁の凡夫としての自覺の上に立つて廣汎な大乘佛教をながめるとき、大聖の眞言は、唯我等をして阿彌陀佛の大名告の世界に導きたまふにすぎなかつたのであります。

聖人は其著述である教行信燈の中に聖人の獨特の信眼によつて眞實の國たる淨土に往生するものゝ、教行、信、證、眞佛土、化身土をあらはして、大聖釋尊の教を判釋し權化と眞實とを開いておられます。

勿論無學なものにでもわかるようなものではなくて、佛説や高僧の説を集めてなされた信仰の記録であります。それを拜讀する時、聖人の非凡な眼に尊敬のみ言葉をはなたすにはおられません。

聖人は學の人でもあつたのです。しかし其學を活躍せしめ、統一づけたものは念佛の一つにすぎなかつのであります。

今や聖人は、關東の人たちにむかつて、端的に『念佛より外に………』と示して聖人の眞面目を大膽に表はしてゐられます。

この如來の全部の廻向である念佛をのぞいて、せられるならば、一切の學問も法文も、それは單なる概念であり遊戯である。眞實の淨土へ往生するものにとつては、それは、大なるあやまりでありました。

(つづく)

心にかよふ道

藤原三千丸

京都は御大典を前に控へてゐるので、彼處此處の街路が改正されてゐます。改正される町に面した家々は古きも新らしきもなべて取り除かれて、其跡には見違へる程立派な廣い街道が次第々々にのびてゆきます。木の香も新しい建物の軒先にうえつらねられた若い並樹にそふて堅いアスファルトの道を歩むのは、やはり凸凹のはげしい古い道を行くより何となくすつきりした清新な感じがいたします。こんな時フト詩聖タゴールの言葉が頭にうかんできます。

『人類がなし得る最高なものは道の建設者になることである。その道とは私慾や權力のための道ではなくて、人々の心が異なる國々の兄弟たちの心に通ふことの出来る道のことである。』

交通の頻繁となるにつれて道路の改善は何處の町でも、何處の村でも重要な施設の
一つとなつてきました。私慾や權力を離れて兄弟達の心に通ふ道の建設に努力して
ゐる町や村がどれだけあるでせうか。寧ろ道路改善のために心の道が踏みじられて
ゐる場合が多いのではないでせうか。

×

昔大和の國の前栽村に雪井寺といふ眞言宗の寺がありました。或時その寺の住職と
村の農夫達の間、寺の門前の道を廣げることについて争がおこりました。住職は廣げ
ることを主張して農夫達の反對に頑として應じません。かようにして三年の間、ゴテ
／＼と議論して決着しないのでした。たまく／＼其地方へ九瀬孫之助といふ人が代官に
任せられてきました。この人は代々禪宗でしたが眞宗の教に歸して日頃厚く念佛を喜
んでゐましたので此の争論のことを聞いて大變氣の毒に思ひましたそこで赴任後問も
なく雲井寺の住職を私宅に招待いたしました。

邪推深い住職はテツキリ此れは早くも農夫達が手を廻して新代官に頼み込んで自分
の方に不利な様に取りはからつたのだらうと思ひながら代官の宅を訪れました。所が
うつてかはつて新任代官のつゝましやかな謙讓な態度に先づ雲井寺の住職は頭を叩か
れました。初對面の挨拶の後に代官と住職とは種々會談しましたが最後に代官が改ま
つて話しかけましたので、住職は例の話だなど思つてゐますと代官は

『時に私は今度當地方の代官に命ぜられてきたものでありますが、聞くところによる
と貴寺の門前の道路の問題で三年來解決出來ぬ争論が持ち上つてゐることです
私はまことに不徳の者で此の争論を解決つけるだけのことは致し得ませんが、此れ
に就いて私を感じましたことを下手ながら和歌に詠んで見ましたのですが御覽下さ
いませんか。』

と云つて紙に書きつけた和歌を差出しました。住職は其の紙を受取つて讀み下しま

した。讀んでは考へ讀んででは考へしていましたが、如何にも慚愧に耐ぬぬと云つた様に代官に一禮して歸つて行きました。一体九瀬孫之丞が住職に示した和歌は如何なるものであつたでしょうか。それは斯うです。

廣かれど願ふ法の道なれや

世の通ひ路はよし狭くとも

法の道の弘通を放つて置いて門前の道を廣げることのみヤツキになつて農夫達と争つていた住職が此の和歌を讀んだ時、慚愧したのは無理からぬ話です。

やがて住職から農夫達に詫状が出されました。深く考へる所あるから前言を撤回する。此れまで此の問題で村を騒がせたことを詫びる。此れからは専念に佛道を精進するから安心する様にと云ふ意味でした。此れを見た農夫達は頑固に住職に反對したことを恥じて相談の結果雲井寺の門前の道を廣げること決めて早速工事に着手し幾許もならずして立派な參道が出来たのであります。

此の話は妙好人傳中に載せられてある話ですが、誠に味深いお話であります。

x

昔から尊い教の弘通に一生を捧げて下さつた澤山な高僧方はみんな人類最高の事業に御努力下さつたのであるとなつかしきにはおられません。それと共に此等尊いお方々の普々ならぬ御努力の賜をばともすれば私慾や權力の道にまで利用しようとする私自身を泣かすにはゐられませぬ。

先日冬休暇で郷里に歸つてゐます間、大法宣布のために活動を續けてゐらるゝ〇〇軍〇〇團などが、物堅いお同行達の憎悪の的になつてゐることの甚だしいのに驚かされました。此の事は何れも冷静に考へて見なければならぬことだと思ひます寺院以外に特別な教線を張れば直ちに異安心呼ばはりをしてそれが恰も世を惑亂するものでもあるかの様に廢拆することもよくありませんが、廢拆を受けることを直様自説の眞

實の立證として御開山當時の念佛停止に例を取つたりして得々としてゐることも考へ物だと思ひます。

善導大師が當時の謬れる數多の觀經釋に慨して筆をお執りになるや

『先づ大衆を勧め發願して三寶に歸す』

と冒頭して十四行の偈をお書きになりました。此れは眞宗に於て葬僕の一番初めに讀まれるもので『歸三寶偈』とも『十四行偈』とも云はれてあります。此の偈の終りには次の様に述べられてあります。

『我れ菩薩藏頓教と一乘海とに依り

偈を説きて三寶に歸す佛心と相應す

十方恆沙の佛六通我を照知す

今二尊の教に乗し廣く淨土門を開く

願くば此功德を以て平等に一切に施し

同じく菩提心を發して安樂國に往生せん』

此の氣概を以て反對の矢を放ち得る者、今の世に果してあるであらうか。打つものも打たる、者も善導大師の此の氣概に接する時深く内省に入らないでは居れぬでせう

x

『人類がなし得る最高のものは道の建設者になることである。この道とは私慾や權力の爲の道ではなくて、人々の心が異なる國々の兄弟達の心に通ふことの出来る道のことである。』

詩聖タゴールの云はれた此の言葉がほんとにそうであると肯かれます。此れを『日域は大乗相應の地』との聖徳太子の聖語と並せ考へますと、私は日本に培はれた大乗佛教の光が世界人類に正當に輝き渡る時がほんとに異なる國々の兄弟達の心に通ふ道の開ける時だと考へずには居れないのであります。(三、一、一、七)

隨感

住岡狂風

二六

❶若き魂 新聞紙を開くと若い女學生たちが自殺した記事が度々出てゐる。それが大概十七八歳である。感傷的になつたのだと一口に云つてしまへばそれまで、あるが肉体も精神も大變動きをきたす頃の心は、何かにつけて感じやすいのではあるまいか。かうした時代の人たちから一番眞剣な悩みを度々聞かされる私は、深く念願せずにはゐられない。どうか周囲の人たちが深い理解と同情とをこれらの上にもつて貰ひたい。人生の暗い方面を見て悲觀するのもこの頃からである。大きな夢やあこがれを持つのも。戀愛に悩むのも、宗教の世界にふみこむのも此頃である。この頃の生き方一つで人生を眞剣にも見てゆけば、横着にも渡つてゆく。父兄たちが無理解なぞして打算的な眼で若い魂を傷けないでくれるようにと念願しないではいられない。

❷正しい立場 生きてゆくことに悩みを感じるのは自分の正しい立場がわからな
いからでもある。私ごもは自分が正しい立場を發見しなければならぬと共に他人に正しい立場を與へることを考へねばならぬ。生命の書である聖典が汚い足袋と一緒につゝこんであつたり、紙屑籠にあるべき反古が机の引出の中にあつたり、本箱にあるべき書物が台所の隅につゝこんであつたり、床の上に傘があつたりするのは、だらしのない心の表現でありそれになれたら心の様子もその通りになつてしまふ。看護婦には看護婦としての正しい立場がある。それを與へたい。子供には子供、學生には學生、下女には下女とそれぞれ立場にあつて、自由な才能を發揮させたい。自分自身を正しい立場におらしめるためには、卑下してはならない。高慢になつてはならない。自分の力一ぱいの延び方は、正しい自分の世界にかへつた時にだけある。

❸法爾の聖化 はからひなく如來の本願を信じてゐる者には自然に如來の印現せられた生活が表れる。私を如來にまで高めようよとしたり如來の生活を眞似たりするのではなくて、如來の御慈愛をすなほに承けさせて頂いて、南无阿彌陀佛の中に生きさせ

て貰ふ者にだけ、こは、つたが私の緊張がされて、本願に生きる法爾の生活がある。

◆魂をもつて 魂で書かれたものは魂でよまねばならぬ。生命を打ちこんで書かれたものでも、寝そべつてよんだ時には、其眞髓はその人の前に姿をかくすであらふ煙草をふかしつゝ佛敎講演を聞く人、寝ころんで聖典をよむ人………尊いものを外に尋ねる前に、先づ我等は虔謙な眞面目な心でむかはねばらぬ。『このまゝの救ひ』『悪人正機の救済』それが魂の全体で沙汰せられない時には、何物をも得ないばかりか、聖人の一切をふみにじつてゐるであらう。

◆仕へる心 一家の主人が活動して一家數人の人が生きてゐる場合、主人が家庭における暴君になつてゐることを度々見受ける。さうした場合、妻君も下女も子供もこの暴君の御嫌機ばかりを氣にしておそろく生きてゆく、家中の者にちつとも自由な人格的な生活がない。支配者と支配せられる者と、ごちらも灰色の世界に息づまるような生活をつゞける。下女は下女で自由にのびきつて働くことが主人への奉仕であ

り、奥様は奥様で自由に自分の立場で働くことが一家への奉仕であり、主人はさうした自由の國で働くことが一家への奉仕であるならば、其處に生命の交響樂が演奏されるだらう。我等はさうした生活を切念せずにはゐられぬ。

◆共に生きる道 『我等が地上に生きてゐる間、自分を傷つけ、他人を傷つけずに生きて行かれるであらふか。他人を傷つける時、自分をもきづつける。自分を害する時、他人をも害する。大經には、『自害 害彼 彼此俱害』と云つてある。自他に傷けないで生きられる商人、自他に害せない教育者、自他に傷つけない宗教家、自他に害せない政治家があり得るだらうか。

人生の必要に深刻な關係をもつ仕事や、深い人生の要求に生れたものだけ、他を生かすかはりに、他を傷けやすいものも裏つけられてゐる。彼此共に害せずには生きられない地上を念ふとき、さびしい心になる。さうして一切のものゝ共に生きる世界を望まずにはゐられないと共に、大地の上にはぢないでは生きられない。如來の救済が

かうした心の上に輝くのではあるまいか。

× × × × × × × × × × × ×

旅の窓より

本部 吉 藤 智 水



H……………さん

お便り有難う御座います。私は講演先の中井醫院の梅咲く春の暖い陽の光が訪れる一室でラジオの放送をきくつゝこのたよりを認めます。

『常に懺悔しても懺悔し得ぬ自分の心を眺めては泣くばかりでございます。』とあなたはお便りに書いておられます。更にまた

『廣い世界に私ほど大膽な罪人はない』との告白で御座います。あなたは始めに

『常に懺悔しても』とおほせになつておられますが、考へて見ますと私達は果たし自分が罪人であるとの深い懺悔の心を常に／＼私自身の上に注いでおますでせうか？時折想ひ出された時のみ『すまなんだ』と言ふ心持ちが起つて来るに過ぎないのではないでせうか？

親鸞聖人様の

『無懺無愧のこの身にて誠の心はなけれ共』の御言葉が私自身の貧しい心持を鮮活に物語つてゐる様に思はれます。あなたが『常に懺悔しても懺悔し得ぬ私』だとの御言葉は神のみ名に於て聖き心に更生せんとして教會に足を運んでお祈りすることを怠らないクリスチャンの心情に等しいのではないでせうか？

眞實の救済とは如何なる意味なるかに深い思索は巡らさないで『いくら祈つても聖くありません』と久遠劫來から祈ることによつて聖くなり得ない私自身の心に目をつけないで、神に祈ることにのみ腐心するのが、彼のクリスチャンの幾分の人達です

七百年後の今日の人たちから聖者として歌はれてゐる人の中に、『虚假不實の此の身にて清淨の心も更になし』と自身の價値を最底價格にまでつき落したお方がありました。私が聖いものとして生きようとする努力からひるがへつて、私自身は、全く無價値な者だこの自覺こそ、私自身を素直に見究めた姿ではないでせうか。『私は黒くなつたのです。もう永劫に美しい元の白紙にはなれないのです。』と悲しんでおられます。ほんとうにそうです。いくら願つたつてその惱ましい、傷いた満たされたい心は癒へないのかもわかりません。今あなたは自分で如何ともすることの出来ないその胸を抱いて苦しさと悶ねとで悩んでいられるのです。

H……………さん

然しそれがあなた一人に限るのだとは思はないで下さい。世間の人々の多くはたとへそれに重い軽いの差はあるにしても、こんな問題に當面して悩みの日を送らなくてはならなくされてゐるお方は。殆んど全部だと言つていゝ位なのです。

恥しい氣持もいたしますのですが、私も現在若き日の夢を見る代りに、いたましい悩みに泣いてゐる身なのです。『罰の子が罪の子を集めて罪を説き』と言ふ言葉があります。私は貴女に高い所から教へを説く者でない事はあなたをよく知つてゐて下さる所なのです。道は違ひしましたが、同じ様に悩みの子であることは事實なのです。然も現在ではあなたよりも、私の方がより深い悩みの日が続けているかもしれないのです。あなたの性格の弱さが作り出した、今日の結婚生活の痛まじさに泣くあなたの前に、ほんに子供の世界に遊歩してゐる私の悩なんか「氣まぐれ」位にしかひゞきをあたへないかも知れません。でも『あなたよりも私の方がより深い悩みを』其の、私の言葉が悩みの深さを、物語つてゐることをお察し下さい。

『人は泣いて生れて泣いて死んで行く、かくして人は一生を涙で色彩る』とか耳の底に残つておりますが、夢見るべき若き日の一日を、業だどあきらめることも出来ないで、泣く／＼辿つてゐる者の姿にもみじめさがあります。

私は曉鳥氏の思想に共鳴するとせないと別として、かつて氏が松川町の法性寺で、洋行土産の講演に申されたことを記憶しております。釋尊は人の死を見て恐怖を抱き出家した。然して後に彼は死が如何なるものかとの、解決を得たのだと、語られました。つまり死か判つたとの結論なのでした。私達が求めてやまないもの、それは全てが判りたいことでなくてはなりません。人は物事に暗くして判らないから、迷ひが生じてくる事は事實なのです。だから暗より光の世界へ！ 暗らさより、明るさの世界への往生、それが萬人の求めて止まない本願であらねばなりません、

H……………さん

明るさの世界への往生、それを極く簡単な例で、彼の電燈について考へて見ませう。スイッチの切られた電燈の下に寝をべつて居て、夕方の暗さが訪れる時、自分が手を動かす事をしないで、いくら電燈の灯る事を要求したからとて、それは不可能な願求に過ぎないので。明るさを求めると同時に、如何にしたら電燈は點せられるかを考

慮しなくてはなりません。彼の法藏菩薩の本願にも、行が附屬してゐて始めて私達を救済して頂くことの出来る「南無阿彌陀佛」の證が出来ました様に、私達の願は如何にして達し得べきかを、考へねばなりません。

佛教では獨生獨死獨去獨來と教へます。これは極く平凡に考へれば、淋しい言葉ですが、これは私に又意味深い言葉でもあるのです。この言葉は、私を救ふ者は私に一番近い、私自身しか居ないことを教へて呉れるのです。

私の行方は、私が展開して行かねばなりません。其の世界にはじめて、廻向顯現する、如來を知ります。お釋迦様は、來いよの招喚と共に、道を尋ねて行け、と發遣の聲を放たれてあることを、わすれてはなりません。

明るさを求めて止むことなき、私自身が立ち上つて行つて、スイッチをいれることによつてのみ、電燈は點せられて來るのです。其處に暗より光りへの展開があります。私が私のあらねばならぬ願求に燃えて、スイッチを入れることに依つてのみ、點す

るべく仕組まれてあつた、電燈の光に浸ることが出来るのです。

H……………さん

他力の救済と云へば、世の中の人達は、懈怠な日暮しを續けつ、他の人に、世話して頂いて生きることが、他力だと考へてゐるのですが、それは親鸞聖人様のお仰せになつた、他力とは違ひます。

もしもかゝる場合は、他力でなしに住岡先生のお仰せになる、無力なのであります。無力と他力とは、よく考へないと兩者のカラクリを、取失つて雲泥の差があることを知らないのであります、私達は無力と他力を取違へて、自己のさもない罪惡辯護の用具に、他力を引用してはなりません。

私達の單なる生存の上に、大きな深い意味が盛られてあつたことを、永遠に獨立者なる自分が、發見し覺知して行くより外に何物もないのです。

『白紙であつた私は、すつかり黒くされてしまつのです。』まごらかな春の暖い空

氣の中にほころびんとせしつぼみ、それを慘酷にも折り取られし哀愁に満ちた現在の貴方の胸中に同情せずにはゐられません。

破果なくも散り初めし梅花、思ひがけなくも受けし痛ましき痛手、いくらもがいたつて、つくろふことは赦されぬかも知れません。こはれたるサクヅキ、それをつぎ合せようと無駄骨折ることこそ、徒勞なのです。こはれたるものはこはれたるものだけの自覺を持つて下さい。其處から新しく出發して下さい。それでもなほ落ちつけない所に愛執深き人間のかなしきがあるのです。

H……………さん

私はこれ以上申上げるだけの言葉を持ちませぬ。此の上は全てを正しい智慧の眼で見きはめて行くのです。無理な願ひに自棄にならないで……………静かに佛の智慧の前に立ちませう！ 其處に我行精進忍終不悔の苦闘そのもの、生活道が体験されてゆきます。では又のたよりにゆずります。(三、二、四、福山にて)

講演
の旅

□一月八日、十一日 安野村津都見 吉藤智水は書席より、主管は夜席より、小田村人氏宅で講演の席は開かれた。

こゝは四年前より縁の結ばれた地で、常に薪炭野菜等を本部に送つて常に本部を御援助下さる地である。それだけ求道熱も盛んで

ある。講演の暇には示談につめかけて一時も休みがない。それに八重村より新保氏阿坂より田坂氏数名加計町の吉見氏栗柄氏等熱心なる求道者たちによつて、有意義な真面目な講演會のおほりをつげた。

□一月十三日、十六日 加計町栖心寺御正忌の講演會である。白雪寒風もおそれず例の如く遠方よりの同行たちもまちつて、聖人の高恩をしのびつゝ、有意義の御逮夜をすこして十七日栖心寺を出る。

□十七日、十九日 加計町齊藤末一氏方 齊藤末一氏は加計郵便局の主席である。

局長猪原氏は富豪で町内での有力者、薬局、醬油醸造業を営み、山縣郡在郷軍人聯

合分會長、其他の公職につき、同地方の人望を一身に集めた人である。更に信仰の人であり。信仰の家である。さうした局長のもとに齊藤氏もまた熱心な信仰家である。栖心寺がすむこ、日定の都合上日があいたのを見た同行たちは遂に齊藤氏宅で引繼き講演會を開いた。語つてもく盡ないし、聞けば聞くほど味が出て遂に一席づゝのばして十九日夜まで語つた。この地方は光明團と五ケ年も關係してゐるので兄弟親子のやうな關係である。見る人も來る人も心安い。二十日の朝苦しい別を告げる。

□二十八日、三十日 賀茂郡東高屋村 熊野支部が急に變更を云つて來たので二十七日まで本部で原稿。二十八日より河内支部の都合が、花井香氏の猪武者的な求めにより河内がゆづつて急に東高屋で開會。花井氏一人の心配は容易ではなかつた。三十一日いよゝ光明團の最有力地東備後十一ヶ所の講演の途についた。

□一月十五日夜本部では主管は留守なれど信仰座談會を開き。大盛會裏に祖師をしの

んで有意義におはつた。

◆花岡悲風氏は廣島市東部の講演會を終へて一月中旬朝鮮傳導の旅にのぼつた。

二月一ばい滞在か、歸團の時はまだわからない。

講演の豫定

二月(備後一圓)

- 二日 三日 深安郡山野村小學校、主催 山野村婦人會、處女會、青年團、村斯民會。
- 五日 六日 七日 芦品郡宣山村
- 八日 深安郡岩成
- 九日 福山市公會堂
- 十一日 十二日 十三日 深安郡市村支部 眞光寺
- 十四日 十五日 十六日 十七日 福山文化協會

光善寺

- 十八日 十九日 二十日 深安郡百谷 眞光寺
- 二十一日 二十二日 二十三日 蘆品郡府中町 濟世軍
- 二十四日 同郡驛家村 草浦醫院
- 二十五日 二十六日 深安郡法城寺村
- 二十七日 二十八日 二十九日 深安郡川口支郡 崇樂寺

注意

- 一。誌代拂込の際は光明と聖光との區別をばつきり記すこと。
- 一。轉居通知は新舊兩住所を書いて下さい。舊住所がわからぬために時々事務は敷時間を徒費します。
- 一。誌代拂込は振替を御使用下さい。切手は使はぬこと。拾銭切手などどうすることも出来ないで困つてゐます。やむを得ぬ時は五厘か貳銭切手に限りませう。
- 一。文字をばつきり正確にお書き下さい。略字で讀めぬ時があります。
- 一。主管に特別の用事の外、申込、中止、送金等は一切事務宛に御送附下さい。
- 一。事務上の間違ひがありましたら、御容謝なく事務宛に御申越し下さい。
- 一。誌代前金切の時はどうかお早く御送金を願ひますお困りのお方は其旨御申越し下さい。

本誌定價

一部 金 十 錢 (郵税共)
一ヶ年 金壹圓貳拾錢 (郵税共)

毎月一回十五日發行

昭和三年二月十日印刷
昭和三年二月十五日發行

編輯兼發行人 花岡 靜人
印刷 人 佐々木温三
印刷 所 光明團印刷部

發行所 廣島市八丁堀二十六番地
光澤 光明團本部
振替貯金口座下開賦金〇八番